

連載

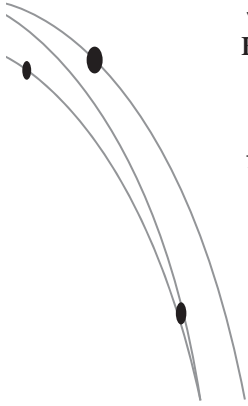
フィールド・アイ

Field Eye

ブリストルから——①

ブリストル大学 山下 順子

Junko Yamashita



「拍手」で伝えるケア労働者への感謝？——イギリスでのコロナ感染者の拡大と高齢者介護

道に拍手と鍋を叩く音が反響する。これまであまり話すことのなかった隣人と笑顔を交わす。2軒先の高齢の夫婦の元気そうな姿を見て安心する。毎週木曜日の夜8時になると、厳しいロックダウン（外出制限）の中、人々が玄関で、窓を開けて、ベランダで、あるいは道に出て拍手をし、音をたて医療従事者に感謝と敬意を表した。ロックダウンが3月下旬に始まってから10週間、このような光景はイギリス各地で続き、首相官邸の前でも行われた。4月には、感謝と敬意の対象に、社会を支える主要な労働者という意味で、キーマーカーと呼ばれるケア労働者や公共交通機関などの労働者も含められるようになった。キーマーカーである人々を、健康上の高いリスクと困難に耐え、コロナ禍の社会を支える「英雄」として称えるキャンペーンが繰り返された。

この週に一度の「イベント」を、友人はこんなに連帯感を感じたことは最近ないといっていた。一斉に沸き起こる拍手の反響は、外出制限が続く中コミュニティをあるいは「社会」を感じるひとときだったのだと思う。コロナ感染症の最前線で対応する医療従事者そしてケア従事者などに敬意や感謝の気持ちを表すこと、あるいは外出制限下で人々が連帯を感じるのは素晴らしいことだと思う。しかし、「拍手だけでいいの？」と思ったのは私だけではないはずだ。このコラムでは、コロナ感染拡大におけるケア労働についてイギリスの状況を見ながら感じたこと、考えたことを書

いてみたい。なお、介護や育児および広く人を世話することを含めてケアとする。

ロックダウンが続く中、この状況は「社会を再構成する機会なのではないか」、「これからの世界をポジティブに描こう」という意見を様々な媒体で目にした。コロナ感染症の流行によって、これまで見過ごされていたこと、あるいは実現が困難だったことが実現しそうな気配がただよったからだろう。それは例えば、過去10年間、緊縮財政を押し進め、福祉や社会保障を大幅にカットしてきた現保守党政府でさえも、前代未聞の予算を雇用支援金に回し、生活保護の申請者数の増加に対応し、国民健康保険サービスの予算を増やし、ホームレスの人たちに仮住まいを提供したことや、車が減って空気がきれいになるといった経験に基づいている。このような変化に対して、よりよい社会を描き直すチャンスが到来したのではないかと期待をよせるのにも根拠はある。

ケアを研究する学者もこのような期待を発信した。コロナ感染症の流行はケア労働を表舞台に出し、ケア労働がいかに社会を支えているかを露呈させた。ケア労働が見えなくなっていること、あるいは見えていたとしても低く評価されていることが、資本主義社会の構造的特徴とするなら、この状況がケア労働を中心に据えた社会を構想するスペースを作り出すのではないかと、という議論である（The Care Collective 2020）。

しかし、イギリス社会で生じた事態は、ケアがまっとうに評価されていないこと、そしてケア労働と社会格差との密接な関わりをさらに顕在化させたように思う。そのことを、今月号で高齢者介護施設とケア労働者について、来月号では家庭内でのケア労働について、2回にわたって書いてみたい。今回は、なぜイギリスの高齢者施設でコロナ感染者および亡くなる方が多数でってしまったのかを、高齢者介護の制度的位置づけと介護労働者の労働条件から考えてみる。

国立統計所の報告書によれば、イギリス全国にある高齢者介護施設の半数以上で感染者が出ているという。また感染者が出た施設の2割の入居者および7%の施設職員が感染したといわれる。4月から7月までの統計では、高齢者介護施設における死因の29.3%が

コロナ感染によるものとされている。スコットランドのグラスゴーにある高齢者施設では、入居者の13人がコロナ感染症で亡くなり、職員3人が陽性となったと聞く (Women's Budget Groups 2020)。

驚くほどの感染率である。コロナ感染症拡大初期の、イギリス政府の高齢者介護施設への対応が原因の一つとされている。これはイギリス社会政策における医療と高齢者介護施設の位置づけと関連している。イギリスでは医療は、国民健康保険サービス (National Health Service: 以下 NHS) とよばれ、税金を財源とし、基本的に住民は無料で医療サービスを受けることができる (薬代は年齢によって自己負担)。看護師と医師の給料格差等の問題はあがるが NHS で働く医療従事者は公務員であり、医療サービスの運営は国の責任となっている。よって、コロナ禍における医療従事者の安全や労働条件も国の責任となっている。しかし高齢者介護は、ここ 30 年で民営化されてきた。高齢者介護サービスを公的資金で利用できる人たちは、所得によってかなり制限されており、貧困対策かつ要介護度の高いケースのみが対象となる。

民営化された高齢者介護サービス事業者に対して、政府は当初 NHS に対するような、コロナ感染症予防策の指針を出さなかった。医療従事者には行われた防護服やマスクの手配および職員への規則的なコロナ感染症テストの実施も行われなかった。さらに、コロナ患者への病床を確保するために軽症の入院患者を退院させる政策によって、病院から介護施設に「戻った」高齢者から、感染が広まったのではないかともいわれている。

しかし、より構造的な原因は介護労働の特徴と評価にあるように思う。介護労働者の低賃金と労働条件が、コロナ感染者が高齢者施設で増えた原因として考えられるからだ。介護労働者を対象とした調査によれば、イギリスの介護労働者の特徴は、大多数が女性で低賃金、そして民族的少数者の割合が高いことにある。女性の介護労働者の平均収入は全体の職種の平均収入の約 65% で、24% が 0 時間契約 (契約に労働時間の記載がない雇用契約) である。コロナ禍における介護労働者の労働状況の調査結果によれば、8 割の介護労働者が、コロナ感染症の症状がでて自己隔離する

必要が出た場合 (政府の指導では 2 週間)、その間賃金を受け取れないと考えている。この調査報告書は多くの介護者が貧困すれすれの生活を送っており、症状がでて自己隔離する経済的余裕がないと指摘している (Hayes, Tarrant and Walters 2020)。病気休暇制度の不足が、介護労働者に症状がでて働き続けることを事実上強制していたのだ。国立統計局の分析によると、コロナ感染症による女性労働者の職業別死亡率が最も高いのも介護職である。

コロナ感染症が急増した 4 月と 5 月に、施設内での感染症の発生を防ぐため、介護施設に泊まり込み入り、介護施設の庭のテントでくらしたりしながら施設入居者のケアを続ける、ケア労働者の「美談」がニュースに流れた。このようなニュースは毎週木曜日の拍手でキーワーカーに感謝を表す行為と類似のものである。「拍手」や「美談」として讃えることで、高齢者介護施設におけるコロナ感染症の拡大を抑止することは難しいだろう。医療サービスの財政拡大や雇用支援金の大幅な増加の中でも、介護労働者への報酬や労働条件の改善がみられないことは、ケアが労働としてまっとうに評価されていないことを示している。確かに、コロナ感染症の流行はケアが社会の中心にあることを可視化した。だが、ケアが社会を支える主要な労働なのであれば、ケア労働者に対しておこなうべきは、拍手で讃えたり英雄扱いしたりするだけでなく、適正な報酬をはらい、できるだけ安全な労働環境を整え、病気休暇制度も含めた労働条件を改善することではないだろうか。

参考文献

- The Care Collective (2020) "COVID-19 Pandemic: A Crisis of Care", *Verso*. Available at <https://www.versobooks.com/blogs/4617-covid-19-pandemic-a-crisis-of-care>
- Women's Budget Group (2020) *Crises and Collide: Women and Covid-19*. Available at <https://wbg.org.uk/media/crises-collide-women-and-covid-19-2>
- Hayes, L., Tarrant, A. and Walters, H. (2020) *Social Care Regulation at Work: Health & Safety*. University of Kent. Available at: <https://research.kent.ac.uk/social-care-regulation-at-work/>

やました・じゅんこ ブリストル大学社会学・政治学・国際関係学学科上級講師。主な著作に『ひとりではやらない育児と介護のダブルケア』(共著、ポプラ新書、2020年)。比較社会政策学、ケア論、ジェンダー論専攻。